

文学強盗の 最後の仕事

エッセイ集・9

井上ひさし



中公文庫



中公文庫

ぶんがくごうとう さいご しごと エッセイ集 9
文学強盗の最後の仕事

定価はカバーに表示してあります。

1998年3月3日印刷

1998年3月18日発行

著者 いのうえ 井上ひさし

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA, INC. / Hisashi Inoue

本文印刷 精興社 カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203085-4 C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

文学強盗の最後の仕事

エッセイ集 9

井上ひさし



中央公論社

目次

文学強盗の最後の仕事

坊っちゃん、漱石先生を語る

淋しいという基調音

漱石との対話の、ごく一部分

フウ

解説にかえて

先生が汽車をとめた話

人文一致のひと

昭和二十二年の井伏さん

46 42 40 36 31 29 27 11

談林俳諧

一葉の財産

接統詞「ところが」による菊池寛小伝

『父帰る』後日譚

車寅次郎氏の変質

二人の筆ノ人に感謝する

魯迅の講義ノート

文学強盗の最後の仕事

シェイクスピア

一人二役ということについて

これこそ真の現代語訳という凄い仕事

形容詞「をかし」について

ニンゲンの可能性はすごい

胸のマークを読み替えて

スワローズ・ファンになった理由

前口上

しみじみ日本・乃木大将

十一ぴきのネコ

イーハトーボの劇列車

シャンハイムーン

日本人のへそ

雪やこんこん

人間合格

人間合格―再演にあたって

*

この劇を観てくださいとうとしているお客様方へ

一生分のエネルギー

すべては劇場で

賢治の祈り

一茶との一夜

はじめに

日本の仇討

初出一覧

文学強盗の最後の仕事

エッセイ集
9

文学強盗の最後の仕事

坊っちゃん、漱石先生を語る

十二月九日は漱石夏目金之助先生の祥月命日^{しやうげつめいじつ}。すぐる年のその日、日頃から『坊っちゃん』こそ半生で出会った小説のなかの最大傑作とかたく信じ込む三文文士の井上某^{なにがし}、なんとか漱石先生にあやかり「あの坊っちゃんの千分の一でもいいから面白い小説を書きたいもの」と思い立って漱石先生好物の甘い物、金鰐^{きんづば}だの紅梅^{こうばい}焼だのを携えて墓参りに出かけるが、雑司ヶ谷墓地へ参るべきところを、朝な夕な愛読する『坊っちゃん』の結尾の文について引きずられてうかうかと小日向^{こひなた}の養源寺^{ようげんじ}に迷い込んで無駄な時を過ごし、すっかり疲れてそのへんの墓石に腰を下ろし溜息をつき頬杖をつく。そのときにわかに一陣の妖風おこって、寺の鐘、気味悪くゴーン。はっとなつて顔を上げると、目の前に五分刈り頭の小柄な男が立ちはだかつて、右

の拳こぶしを高だかと振り上げている。なお、左手に下げたのは笹飴のようなものが一束。

「笹べらぼう棒め、他人様ひとさまの大事な墓をベンチ代わりにする奴がどこの国にある。間拔め。その墓の中にはおれの大事な人が入っているんだ。そこには人間として頗すこぶる尊たうといお方がお眠りになっているんだ。失敬千万じゃないか。その汚い尻をさっさと脇へどかせ」

小柄で頭は五分刈り、振りかざす右手の親指の甲に斜はすに走るナイフの創痕きずあと、左手に下げた笹飴、思い切り巻き舌のべらんめい調、そして「人間として頗る尊」という独特の言い回し。四百字詰に換算して二百十五枚の中編小説『坊つちやん』をほとんど誦そらんじるぐらい読み込んでいる彼の三文文士はびんときて、なおも五分刈り男を食いつくように見詰めている。

「なにを見ていやがる。顔のなかを御祭りでも通りゃしまし、薄気味の悪い奴だ。しまいにはおれの顔に穴が空くじゃないか」

——顔のなかを御祭りが通る……。おお、その台詞が言えるのはあなたしかいない！

三文文士は墓石から脱兎の如く飛び退き、感激のあまり一瀉千里に捲し立てる。

——あなたは子供の時分から、寝るときに勢いをつけて頓と尻持をつく癖がおりじゃありませんか。あなたのその癖、我が事のようによく知っております。あなたのことを「乱暴で乱暴で行く末が案じられる」と仰しやっていたお母さんが、たしか十年前に病死なされた。それから六年後、すなわち四年前の正月、あなたの顔さえ見れば「貴様は駄目だ駄目だ」と口癖のように仰しやっていたお父さんが卒中で亡くなられた。さらにその半年後、子供のころから色白で芝居の真似をして女形になるのが好きだったお兄さんが高等商業を御卒業、家屋敷のある金満家に譲って家を畳み、何とか会社の九州支店へ赴任なさった。さて、あなたは洋食屋の多い神田小川町の二階の四畳半に下宿、お兄さんから受け取った六百円を学資に物理学校へ通い始める……。

「おれのお故事来歴にばかに詳しい奴だな。ひょっとすると貴様は探偵か。ははん、読めた、向う横丁の角の西洋館におれの身辺を探るよう頼まれたのだな。あすこのだいぶ臺の立つた御令嬢が、なんでもおれに思召しがあるらしい。生前の清がこう言っていた。『西洋館の御嬢さんが用もないのに家の前を日に三遍も往ったり来たりなさる。いやに頬骨の張った方で、ああいいう御面相の持主は亭主を不仕合せにすることがございますよ』とね。お

れだってああいう金満家や実業家の娘は虫が好かないから願ひ下げだ。貴様の雇主に言っておけ。おれは生涯、妻なるものは持ちません」

——相変わらずそそっかしい方だ。わたしは探偵でもなんでもありません。寝るときは頓と尻持をつく癖について話をしていただけです。その小川町の下宿で、あなたの部屋の真下にいた法律学校の書生さんがねじ込んできた。曰く「あの頓がいつくるかいつくるかと思うと気になって本が読めない」、また曰く「それどころか神経衰弱の一手手前だ。やめてほしい」……。

「そんな苦情はお門ちがいだ。寝る時にどんどん音がするのはおれの尻がわるいのじゃない。下宿の建築が粗末なんだ。掛ケ合うなら下宿へ掛ケ合え。そう言って凹^{へこ}ましてやったが、それがどうした。寝るときに尻持をつくと懲役に行かなきゃならないという法律でもできたのか」

——これで寝るときに頓と尻持をつく癖もお持ちだということがはつきりました。もう間違ひありませんや。さ、金鰐を召し上がれ、紅梅焼はいかがです。

「おれの好物をずらりと揃えたな。食い物ごときで籠絡されるようなおれじゃないが、あんたもそうたいした悪事ができるような顔ではなし、せっかくだからいただくか」

五分刈りの男は、笹飴を墓に供えたと端折った着物の裾を下ろしてしばらく神妙に墓前に手を合わせていたが、やがて右手に金鐙、左手に紅梅焼を掴んで、すぐ横手の墓に腰を下ろす。それからなんだか重たそうに左の袂を上げてみせて、

「清がこんなふうに冷たい四角四面の石になってからは、持ちつけない庖丁を持つのが剣呑で、また面倒で、朝晩、芋を煮て喰っている。もちろん芋だけじゃ命がつづかないから、こうやって袂に生卵を仕込んでおいてときおり栄養を補給しているのだ。そうでもしなくちゃ一週四十八時間の電車運転が出来るものか。今日は金鐙と紅梅焼で口に栄耀栄華をさせてやろう。……うん、うまい」

——ところで、東京市街鉄道にお入りになったそうですが、しかしまあ、よく大人しく勤まっていらいしゃいますな。

「どういう意味だ」

——その街鉄にも赤シャツや野だいこのような奸物や俗物がうじゃうじゃいるはずですが。

「ああ、世の中はどこも赤シャツや野だいこの大安売りだ」

——だから妙なんですよ。

「なにが妙だ？」